

◆◆◆ スギ花粉花芽調査あれこれ

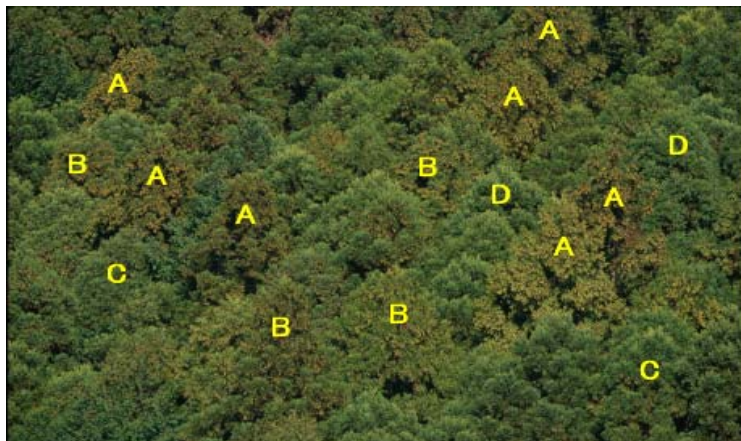
今年も黄色い悪魔の粒子が舞飛ぶ季節が、近づいてきました。今回は、この黄色い悪魔の工場とも言うべき花粉生成現場の調査について紹介したいと思います。

スギ雄花の着生量観察法は、横山氏（財団法人林業科学技術振興所）と金指氏（独立行政法人森林総合研究所）によって開発された手法で、対象となるスギ林から無作為に選ばれた40本の観察木の雄花の着生度合いについて次の4段階での評価結果を集計して雄花着花指数を算出するものです。

- A：雄花が特に目立つ、陽樹冠全面に着生、雄花群の密度が非常に高い。
- B：雄花が多い、ほぼ全面に着生。
- C：疎らに着生、あるいは、陽樹冠の限られた部分に着生。
- D：雄花が観察されない

（写真（上）提供：財団法人林業科学技術振興所 横山敏孝氏）

この観察は、11月中旬から12月中旬の雄花が黄色に色づいた頃に、双眼鏡を用いて行います。晩秋のスギの樹の着花状況と実際の雄花数は、横山氏らの研究により対応が明らかにされています。A、B、CおよびDに該当する樹の本数から回帰式によって、林分内の1㎡当たりの雄花数である雄花生産量が算出され、翌年のスギ花粉総飛散数を予測に用いる基礎資料にされます。



全国各地で林業関係者および花粉情報提供者がこのような観測を行っており、私もこの年末に関東地方の複数箇所のスギ林を回って、スギ雄花の着生量の観察に行ってきました。

この観測の際、今年に関東地方のスギは多くの花芽をつけてはいるが、花芽の房が短く雄花が小さい特徴が見られました。また、左下の写真のように房の先端の雄花が枯死して落ちてしまっているものも多く見られました。昨年関東地方では、7月の猛暑から一転して8月には冷夏にな



った影響で、雄花が育ちきれなかったようです。東京では今年は昨年よりも花粉飛散数は少なくなると見込まれますが、2年連続して3000個/㎡以上の飛散となるので、花粉症を発症していない人も、花粉を浴びないよう十分な注意が必要です。

（（財）気象業務支援センター振興部専任主任技師
鈴木基雄）